短篇集

風の声

大谷藤子

新潮社版

© Fujiko Ōtani, 1977 Printed in Japan

短篇集 風の声

昭和五十二年十一月十五日印刷
昭和五十二年十一月二十日発行

著者 大谷藤子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七十一
電話・業務部(03)二六六—五一一一
・編集部(03)二六六—五四一一
振替 東京四—八〇八

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価 一〇〇〇円

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

風の声 7
姉とその死 31
郷愁 55
悔恨 87
鎮魂 119
歳月 145
私の叔父 165

装幀　原　万千子

短篇集風の声

風の声

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

その駅で電車を降りると、二月の刺すような冷たい風が吹きつけてきた。東京から電車で一時間半ばかりのところだが、海沿いの埃っぽい荒涼とした感じの町である。見知らない町へ来たという気持が、吹く風の肌ざわりからも感じられた。

「竹井さんですか」

階段をのぼりかけると不意に私に声をかけるものがあった。体格のよい若い娘が私の前に笑顔で立っていた。見知らぬ娘のその人なつっこい笑顔が佐々木繁子にそっくりだったので、私は身震いのようなものを感じ懐かしさも感じた。これが繁子と彼の間に生れた娘なのかと心に鳴り渡るような気がした。私は繁子の死にたいして悔みを述べ、迎えにきてくれたことへ礼を言った。

「よく、わたしがわかりましたね」

「駅へ降りる人を呼びとめては、竹井さんですかって訊ねたんですよ。これで三人目……」

と、娘は笑った。

車をひろい、町はずれにあるマンションへ行く。そのあたりは家らしいものもなく、広い木立ちもない寒々とした土地に巨大な建物がニョッキリと立ちあがるような姿でそびえていた。佐々木繁子はそのマンションの十一階に住んでいたのである。

「どうして訪ねてきてやらなかったのだろう。十一階で死ぬなんて……」

私はあたりを眺めまわして心の中で呟きながら、その孤独を思わせる風景がつらくなった。

昨年の十一月、繁子は私を訪ねてきて「今度、引っ越したの」と言った。

「娘の近くなの……」

名刺に新住所を書き入れて、私に渡した。彼女が結婚してから私は訪ねて行ったことがなかったので、新住所を書いてもらっても意味がないようにそのときは思った。いつも彼女が私を訪ねてきて、それは一方通行のようなかたちだった。彼女が結婚してからだから、そんな状態が三十年あまりも続いたのである。二三年前に彼女の夫がガンで死んだときも、私は見舞いにも行かなかったし悔みにも行かなかった。

昨年の暮、彼女を知っている友人から彼女が病気だということを私は聞いた。それも相当に悪いというのだった。私は初めて彼女の名刺を取り出し、電話番号が書き入れてあるのを有難く思った。

「ご心配をおかけして、どうもすみません。年が越せないかも知れないってお医者さんから言

われたんですけどね。……でも、もう元気になりましたのよ」

かすれたような声で、彼女は言った。

「そんなに悪かったの？　起きていては駄目じゃないの。誰か、そばについていてくれるの？」

「娘が、ときどき見にきてくれます。あれは結婚しているので、こちらの都合ばかり言っていられませんわ。……いま、お電話でちょうどよかったの。起きてトイレへ行ったところだったので……」

「大事になさいよ」

「あと一と月もすれば、きっとお伺いするわね。大丈夫、もう峠をこしたから……わたし、悪運が強いから、すぐ元気になってお伺いしますからね」

それが最後の電話になった。

私はその電話のあと、彼女のことは少しも心配しなかった。彼女は病気だったが、おいおい恢復に向っているのだと信じこんでいた。一と月もたてば、ひょっこり彼女は訪ねてくるだろうと軽く考えていた。

「わたしより若いのだから……」

と私は自分に言い聞かせて、電話もかけなかったし、彼女のことは忘れるともなく忘れていた。その間、彼女は死と戦っていたのだった。

私の心に遠い昔の或る日のことが浮んできた。それは長い歳月がたっていろんなことがあっても、忘れることが出来ないほど心に焼きついていた。そのころ、私は湯島の露路奥に繁子と二人で借家住いをしていた。

おでんと書いた大きな赤提灯のさがっている店屋の横をはいった露路で、そのおでんやのところから向うに湯島天神の鳥居が見えた。その反対がわの坂道を降りると、電車が走っていた。

あのとき私は坂道をかけ降りて、繁子に訊ねていた。

「どこへ行くの？」

繁子は叔母の家へ行くと言って出かけたのだが、叔母の家へ行くのとは反対がわの電車を待っていた。私は、その姿を見ただけでくらくらした。

「佐々木さんのところへ……」

彼女は私から眼をそらして答えた。

「佐々木さんだって？　まあ、あきれた……うちを出るときは叔母さんのところへ行くって言ったくせに……」

「許して……」

私は虫の知らせのようなものがあって、彼女が家を出るとすぐ追いかけてきたのだった。佐々木三郎は私の友人で会社へつとめていたが、私は彼から結婚してほしいと言われていた。

一週間待つから、それまでに返事をしてくれ、と彼は言った。

私は彼が好きだった。故郷の村で婚約していた従兄が私の親友と恋愛して、結婚したので、その怨みといいたい心の痛手がやっと薄らいできたところだった。私は繁子に隠さず佐々木三郎とのいきさつを話した。

夕方になると、勤め帰りに立ち寄ってくれる彼が待たれるようになっていた。コツ、コツと靴音が露路に聞えてくると、それは誰の靴音よりも格調のある優雅な響きに思われて、私は胸がときめいてくるのだった。それにしても、一週間どころか一と月あまりたつというのに、彼と私との間には何事もおこらなかった。

「じゃあ行ってらっしゃい」

私は突き放すように繁子に言った。いつもの繁子なら、私がそう言えば思いとどまるのだが、電車がくると飛び乗って行ってしまった。

その晩、私は湯島天神の境内で一人でベンチに腰をおろしていた。あれから四十年近い月日がたっているから、いまはどうなっているか知らないが、そのころは境内に屋台が一つか二つ出ていて、仄暗い燈火をともしていた。その一つは、おでんやだった。酒好きな佐々木は、よく私と繁子をつれて、おでんの屋台に立ち寄ることがあった。灯りのぐあいで、人の顔が赤茶けてみえたが、浅黒い佐々木の顔は酒のせいもあって奇妙にどす黒く赤茶けて不気味なほどだった。

そんな帰りに、繁子は私にささやく。

「結婚すればいいじゃないの。結婚なさいよ」

私は不意に胸をかきむしりたくなった。何故、繁子は帰って来ないのだろう。彼女は佐々木に会いに行ったきり、帰って来ないのである。初めのうち私は、もしかしたら繁子は佐々木に会って私との結婚をまとめるつもりかも知れないと思い直して、救われたような気がしたのだった。繁子が私を裏切るとは思いたくない。裏切るなんて、そんなことをするはずがない。何ごとも悪いほうへ、悪いほうへと考えるのは私の悪い癖だが、その悪い癖を取って捨てれば気が楽になる。彼女は裏切るはずがないと思うことにした。

昼ならば、すぐ向うの下のほうに不忍池が見えて、その向うに上野の森がこんもりと黒ずんで見えた。しかし、いまは夜だから、ネオンサインに色どられて、池も森も見えない。その見えないということが、この夜にかぎってもどかしく、ネオンサインを叩き消してやりたくなるのである。

不意に若い女の叫び声がした。不忍池のほうへ降りる長い石段の下のあたりから聞えた。

「だから言ったじゃないか。夜はここを登るのは無理だって……」

と、男の声がする。

女は男にささえられて暗い石段をのぼりたかったのだと私は思った。木立ちの繁みを見おろすと、一つ二つの青白い灯りに照されて繁みの葉むらは鮮やかに浮き出ているが、下の石段は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com